気軽に話してみませんか

カウンセリング相談のご案内

話すことの効用

宇部地区担当カウンセラー 細川 理香

コロナ禍で制限されたものの一つが、対面で話すことで す。食事を囲んでの会話に限らず、何気ない立ち話や挨 拶が日常に潤いを与えていたと改めて気づくことになりま した。気の進まない会や棘のある言葉を聞くことが減っ た良さはありますが、対話の減少は私達の心に大きな影 響を与えていると考えています。一方、オンラインでコミュ ニケーションをとることは増えました。設定がうまく行か なかったり、話すタイミングが難しかったり、ぎこちなさ はありますが、方法は違っても人と繋がれる感覚は共通 のものです。ダイバーシティ推進室のカウンセリング相 談は、対面とオンライン、どちらにも対応しています。 カウンセリングというと、敷居が高い印象があるかもし れません。気の置けない友人との雑談に心がほぐれる経 験をしたことはないでしょうか。その延長線上にカウン セリングでの対話があると思っています。「こんな話でい いんですか?」と言われることがあります。どんな話で

も OK です。気安い雑談から、誰にでも言えないモヤモ

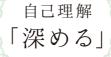
ヤもお聴きします。お気軽にご利用ください。



山口地区担当カウンセラー 桜井 恵

ダイバーシティ推進室のカウンセリング相談では、「お話 を聴き、一緒に考えていく」(気がかりや解決したいこと を話し振り返る時間を持つ)、「箱庭」(ミニチュアを砂 箱の中に置いて、自己表現する)、「自己分析の試み」(質 問紙などを使って、自己理解を深める)、「心身のリフレッ シュ」(自分本来の持ち味が発揮できるよう、リラックス する)など、それぞれのご希望に添って対応させていた だいています。医療機関等のカウンセリングではなく、 合わせについての守秘にも配慮しています。

「モヤモヤが解消されて、研究や仕事に集中しやすくなっ た」、「自分の傾向を見つめ直すことができ、生活や仕事 に活用できた」、「興味があることをゆっくり話せて、リ フレッシュになっている」などのお声もいただき、ご一緒 に共有しながら、気づきや発見に出会える時間がとても 貴重でありがたく感じています。新しいチャレンジも含め て、ご希望に添えるかどうか検討しながら安全かつ柔軟 に対応していけるよう考えています。まずは、お気軽に ご連絡いただけるとうれしいです。



自己表現 「気づく」

&リラックス

探究・内省 「発見する」

軽くなる」





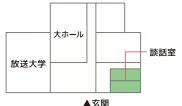
どんなことを話したらいい?

・仕事のこと、自分自身のこと、人間 関係、パートナーシップ、育児、介 護、家庭生活、ワーク・ライフ・バランス、 今後のこと、興味があること、…など、ど

吉田キャンパス

大学会館1階 談話室

大学会館1階



毎週月曜日/第2:4火曜日

小串キャンパス

医心館2階 保健管理センター カウンセリングルーム

カウンセリングルーム 毎週木曜日

常盤キャンパス

ダイバーシティ推進室分室

本館2階 ダイバーシティ推進室 分室

毎週火曜日



専任カウンセラー直通メールアドレスに お名前、所属、連絡先、面接希望日時を記入のうえ、メールで **国**野 お申し込みください。カウンセラーより折り返し連絡を行い、日時を決定します。

山口地区: yd-sodan@yamaguchi-u.ac.jp 宇部地区: ud-sodan@yamaguchi-u.ac.jp

ダイバーシティ推進室ホームページ カウンセリング相談のコーナーから、フォームを利用してメールを送ることも可能です。







山口大学ダイバーシティ推進室 ニュースレター vol.02

編集·発行 山口大学ダイバーシティ推進室

〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1 (事務局 1 号館 3F) TEL 083-933-5997 / FAX 083-933-5992 E-mail ydpo@yamaguchi-u.ac.jp URL https://ds0n.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~diversity/



ダイバーシティ推進室 ニュースレター NEWSLETTER

ダイバーシティとは「多様性」を意味する言葉です。日本において、1985年の「男女雇用機会均等法」を契機に日本での 推進が動き始めました。現在では、男女の人権の尊重を起点とし、高齢者や外国人、障害者など様々な人材の活躍のため の言葉として浸透しています。

ダイバーシティが推進される背景としては、少子高齢化社会、価値観の多様化、ビジネスのグローバル化などが挙げられ ます。ダイバーシティを受容することで、新しい視点からのイノベーション、競争力の強化などの実現が期待されます。

山口大学では、大学を構成する全ての人と、地域の人々が、互いの歴史・文化・民族・言語・宗教などの違いを超えて、共感・ 共鳴・共奏できる「ダイバーシティ・キャンパス」を目指しています。

文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)」

CONTENTS 特集:対談

ダイバーシティ(多様性)の中で進化し続ける女性研究者

山口大学は「保育三本柱」で教職員のワーク・ライフ・バランスを支援しています

推進室の取組

活動報告

カウンセリング相談のご案内

p.6-7

p.2-4

p.5

8.q

IVERSITY PROMOTION OFFICE NEWS LETTER VOL 2 / 03



女性研究者 対談 ♪。。

ダイバーシティ(多様性) の中で 進化し続ける女性研究者

山口大学で なぜ今「女性活躍」が求められるのか?

鍋山:今「女性活躍」が注目を浴びています。山口大学でも「女性研究者支援」や「女性の上位職登用」などに取り組んでいますが、女性研究者として、今のこの動きをどう感じていますか。

永嶌: これまで男女平等ではなかった部分があって、この不平等をなくすためには必要な動きだと理解しています。ただ、「女性限定公募」などは、女性として非常に疑問に思う部分があります。具体的には「女性だから採用された」と思われてしまうと、採用された女性研究者にとってもプラスにはならないし、周りの研究者のモチベーションの低下にもつながりかねないのではと思っています。

島田: 私自身「女性限定公募」で採用していただいて、自身の研究室を持つことが出来たという点ではありがたいと思っているのですが、同時に、「女性限定での公募だからダメだった」と言われないように、研究の業績を評価していただけるように、成果を出そうと努力しています。研究の世界では、ポジションやグラントを勝ち取ることは、男女ともに非常に厳しく、女性限定公募が良いのかどうか賛否両論あることも理解しており、難しい課



題であると考えています。

鍋山:女性研究者数が少ない中で、女性ということでチャンスをいただける現状に甘んじるのではなく、なおさら頑張りたいという感じですよね。

島田:はい、現在、私自身も女性研究者として支援していただいている中で成果を出すことは、これからの女性研究者の方々に対する支援制度を発展させるためにも必要だと思っています。支援制度が必要にならないくらいの社会状況になることが望ましいです。さらには女性自身の意識改革も必要だと考えます。

小柴:私は工学部に所属しているのですが、工学系は特に女性の人数が少ないです。本来、女性は 50%いてもおかしくないと思うので、批判があったとしても制度を導入して、支援していただきながら、まずは女性の人数を増やしていくということが大切だと感じています。

永嶌:まずは女性研究者を増やすことは大事です。今はまだ女性研究者が少なくて、女性限定公募とか、女性優先採用という制度を整備しなくてはいけないことも理解していますが、現在の女性研究者である私たちが呼び水になるのが理想だと思っています。女性研究者の私たちを見て、女子学生も「やれるんだ」「進学しよう」と思ってもらって、女性研究者がどんどん増えていけば、女性限定とか女性優先と言わなくていい時期が来る、今はその変える時期の初めの人として、女子大学院生が増えるための呼び水として私たちの存在を使ってもらえれば大いに結構だと思っています。

島田: 私も同感で、女性研究者のイメージとして特別な人、特殊な人しかなれないというイメージがあります。 私も大学時代はそう思っていました。 でも、私たち女性研究者がいることで、女子学生のロールモデルとなって、私のように普通の人でもやりたければなれるんだっていう考えを持っていただければいいなと思っています。

鍋山: そうですね、特別な人、飛び抜けた能力がある人しか働けないというイメージを払拭して、研究が面白いと思った人が普通に仕事の一つとして研究者を選択できるようになるためには、今の研究者の存在を知ってもら

うことが大切ですよね。

そのためには、女性研究者の皆さんに負担をかけてしまって申し訳ないのですが、ぜひどんどん皆さんを見て欲しい、知って欲しいという想いで、広報させていただきたいと思っています。

「女性支援」ではなく、「男女とものワーク・ライフ・バランス支援」に

鍋山:「女性活躍」とか「女性支援」というと女性だけの支援、女性だけの特別枠というイメージになりがちなんですが、山口大学では、女性だけではなく、男女とものワーク・ライフ・バランス支援、男も女も関係なく仕事と生活の両立を支援するというところに持っていきたいと思って取り組んでいます。例えば、育児支援にしても女性の支援と思われがちですが、育児は男女ともにするべきだし、介護も同じです。

現状では圧倒的に女性の人数が少なく、過渡期なので、 女性の支援という動きになりがちなんですが、「女性支援」 が必要のない状況が理想だと思っています。

小柴:女性研究者や女子学生の人数が少ないということで、仲間作りの支援方法としてよく多く考えられるのが「女子会」なんですが、最初から男女を分離するという視点しか感じられません。本当は融合させることが大切だと思っていて、その支援が必要だと感じています。

島田: 私自身、4年前に山口大学に着任した時は、教育の基盤作りや研究室のセットアップもあり、とても大変でしたが、大学の色々な支援制度、例えば、研究補助員制度、メンター制度、長期休暇中の学童保育などが充実していて、とても助けられました。ダイバーシティ推進室は、働きやすい環境づくりに取り組んでいらっしゃって、嬉しく感じています。

鍋山:嬉しいお言葉をありがとうございます。実は、私自身も、夫が関東勤務で、週末のみ帰宅するので、平日は母子家庭という形で 20 年間過ごしてきました。山口大学に着任した当初は、本当に支援制度など何もなくて、地域の育児支援を使ってやってきました。

だからこそ、自分がこんな支援があったら研究しやすいとか、頑張りやすいと感じたことを支援制度として実現していくことで、若い世代の人たちが少しでも苦労なく研究に取り組めるなら非常に嬉しく感じます。

私たち女性研究者が頑張っていくことで、次の世代の方たちは少しでも私たちの味わった苦労をせずに、当たり前に活躍できればいいなと思います。

小柴: 私も同感です。山口大学は、山口市と宇部市に 3 キャンパスがあり、吉田キャンパスの方が女性支援に対しての取組や雰囲気が高いと感じています。私のいる工学部ものづくり創成センターでは、女子にも男子にも、居場所のなくなった子たちが自由に来てもらえるように努めているのですが、そういう居場所作りへの支援もしていただきたいと思っています。

鍋山:キャンパスが分かれているので、まずは吉田キャンパスで試行することが多いのですが、なるべくキャンパス差がつかないように、段階を追ってになりますが、山口地区、宇部地区ともに実施するようにはしていて、学童保育は昨年度から、カウンセラーの配置は今年度から、両地区で実施するようにしています。やはりニーズと費用対効果の双方を考慮しながらの実施となるため慎重にならざるを得ません。ぜひ声を挙げていただいて、ダイバーシティ推進室にニーズを届けていただけると、



実施につながります。

様々な枠を越えた「共同研究」

鍋山:キャンパスが分かれているという話が出ましたが、様々な枠を越えるという意味で、文系理系などの分野、他大学や企業、地方自治体などの機関を越えた共同研究などを推奨していますが、いるいろな研究者と組んで大きな研究をするということに関して、難しさや、もっと促進して欲しいなどで意見を伺いたいのですが、いかがでしょうか。

永嶌:私は、山口大学の一つの売りである「山口学」というプロジェクトに参加させていただいています。そのプロジェクトで、同じキャンパスにいながら全く関わったことのなかった文系の先生方との面識を得ることが出来ました。また、そのプロジェクトによって、私たちの技術や知識が、他の分野でも活かせるのではと考えるきっかけになり、様々な枠を越えた共同研究は、大変有意義だと感じています。さらに、これから推進体などを始めようと考えているところです。学内に知らない先生がたくさんいることは、本当にもったいないと思います。山口大学の中には、面白い研究をしている先生がたくさんいて、一緒に出来ることがたくさんあるということに気づいたので、これから活かしていきたいと考えています。そこに学生さんも巻き込んで、文系理系関係なく、研究者、学生さんをごちゃまぜにして楽しい研究を展開していく予定です。

共同研究は、楽しむためにやっているので、研究費を得るために、やりたくない研究で申請をしないようにしています。本当にやりたい研究をするための環境整備のために資金を得たいと考えています。

鍋山: わくわくしますね。それは、まさにダイバーシティですね。 **小柴**: 私も同じように推進体を大きくしていて、工学系

や教育系の学生さんも巻き込んでやっているのですが、

結局は資金がないと動かせませんし、せっかくみんなが 一緒に取り組んだ研究を形にするためには研究費が必要 なので、補助金獲得のために申請をしたり、地方自治体 や企業、地域の人を誘って、地域に根差したプロジェクトを実施しています。

永嶌: やりたいことをやるためには、やっぱり予算が必要だし、だからといって、予算集めに振り回されると、本当にやりたかったことはこれなんだろうかと自問自答しながらやることになってしまうし、バランスが難しいですよね。

島田:3年前に採択された拠点群形成プロジェクトのチーム形成では、異なる学部の先生方や、学外の先生方にもご協力をお願いして、すごく大変ではあったのですが、シンポジウムを開催したり、共同研究に発展したり、その時想定していなかった大きなメリットがありました。研究を軌道に乗せることができたのも、拠点に採択していただいたおかげです。専門性やバックグラウンドが違うということで、上手く融合出来れば、視野が広がり、研究の展望も広がると思う一方で、価値観や共通言語の違いという難しさもあると推測しており、今日、先生方のお話を聞いて、幅広い分野のチームで研究されていることに驚きました。

永嶌:確かに、異なる分野の先生方と共同研究すること

の難しさはありますが、今は、その分からないことも楽しもうと思っています。分野が異なると初めて知ることも多くて、尋ねると、親身になって教えてくださる先生も多いし、そういう先生方と一緒に仕事できることは恵まれていると感謝しています。楽しんで、学生や、他分野の先生にも還元していきながら、5年、10年先に大きなものに実れば良いと思って研究をしています。大学にいるから出来ることですよね。

そして、ただ楽しんで研究をするだけではなく、地域の 人に発信をしたいと思っています。私の研究は、地球の 成り立ちだったり、人間の文化だったりするので、まず は地域に住んでいる人に知って欲しいです。

「研究者」とは? 「研究者」になった経緯について

鍋山:女性研究者の方たちとお話をすると、研究から「楽しい」というキーワードが出てくることが多く、皆さんが本当に研究を好きなことが分かります。

島田:はい、結婚や出産、子育て、介護などのライフイベントを抱えると、研究をする状況がどんどん過酷になってくるので、研究が好きという気持ちや、研究したいという気持ちが強くなければ、研究を続けていくことは出来ないと思います。女性研究者がライフイベントに直面した場合、辞めてしまう方も多くいるので、結果として、残っている女性研究者は特殊だと思われがちです。

鍋山:研究とライフイベントとの両立のハードルを下げる ことが出来ると、特殊とか、特別な人ではなくて、純粋 に面白い、楽しいということで研究を続けることができ る女性研究者が増えるかもしれないですよね。

永嶌:私は女性研究者の皆さんに聞きたいことがあるんです。

男性研究者は、研究者になりたいと思って研究職に就く

方が多いと感じています。私は、研究者になりたいと思ったことはなくて、卒論をやっていたら、もっと知りたいことが出てきたから研究を続けたいと思って、大学院に行く、新しい課題が出る、途中で投げ出せない、続ける、という状態で現在に至っています。研究をしていくと辞めるタイミングがありません。辞めるタイミングがなく研究を続けた結果、研究者となったという私の経緯は、私の性格によるものなのか、他の女性研究者の方々も同じなのか気になっています。周りの学生を見ると、実験とか半ばで辞めていく学生が多くて、もうちょっとやったら面白い結果が出るのに、よく途中で辞められるなって思うんです。皆さんはどうですか。

島田:学生に結果を出させるためには、教員も忍耐強く 指導する必要があります。そうでないと、学生はすぐ諦 めるか、間違った方向に進んでしまいます。私も永嶌 先生と似ていて、学生の頃に研究者を目指したいとか、 教授になりたいとか思ったのではなくて、好きな研究を 続けたいという気持ちがあり、その中でも、先々のこと、 結婚や出産したらどうなるのか不安に感じながらも、や るだけやってみるという風に覚悟をして研究をやっていく と、様々な課題や疑問、興味がどんどん出てきて、それ を追究していくということを繰り返して今に至っていると いう感じです。

ただ、任期付きのポジションとかであれば、任期満了までに業績を出す必要がありますし、業績を出して認められたとしても、ちょうど良いタイミングでポジションをもらえるということも難しいですし、そのタイミングと育児などが重なると、続けるのは無理だと思って辞めてしまうということも理解はできます。

小柴: 私は皆さんとは違うルートなんですが、元々、音楽大学で学んで、卒業したらモノを作る仕事がしたくなり、企業に就職した後で、研究者になりました。それこ





そ研究者になる前は、自分で研究をしたいと思っても出 来ず、論文を出しても信用もないし、採択もされません。 一度道から外れると、本当に難しい、私は死ぬほど苦労 して、やっとの思いで研究者になりました。

ただ、本当はそれではいけないと思うんです。ダイバーシ ティの醍醐味はいろいろな経験をたくさんして、さらにそ こから追求して本物にしていくということが必要なはずな のに、社会がそうなっていないので、一度、道から外れ た研究者が研究の道に戻ってくることは、大変厳しいで す。これからは、道を外れても、いろんな経験を積んだ、 様々な視野を持った研究者が研究出来る社会になったら いいなと思っています。

鍋山:大学内にいろいろな研究者がいる、分野の違いだ けでなく、プライベートも、研究職に就いた道筋も本当 に様々で、だからこそつながっていくことで、思いがけな い成果が出せたり、面白い研究が出来たりするんですよ ね。大学の研究者って、お金をもらって研究が出来る、 そして、そこに集ってくる学生たちに自分の研究の面白さ が伝わって、学生の意識が変わったり、教育の醍醐味を 味わえたり、すごく幸せなポジションだし、良い仕事だと 思っています。

「ダイバーシティ」は面倒くさい?

鍋山: 先ほど、共同研究では専門性やバックグラウンド、 価値観や共通言語の違いから難しさを感じるというお話 がありましたが、まさに「ダイバーシティ」って面倒臭い んですよ。同じ分野で、共通言語だけで語っていたところ が、いろいろな価値観やバックグラウンドの人達と一緒に 何かをしていこうとすると、うかつなことを言えないし、 相手のことを本当に考えないといけないし、面倒くさい、 でも、その先に今までに見たことのない景色が広がって いると思うので、面倒くさくても、そうやって出来ていく ものを楽しみながら、連携をつなげていって欲しいと感じ

女性研究者は、仕事として研究というのではなく、研究 をしたいと思ってやっていたら、研究者になっていたとい う人が多いように感じています。だからこそ、大変な面 はあっても、すごく面白そうに、楽しそうに研究している 方が多くて、そんな女性研究者が生き生きと研究してい る姿を発信していきたいと思います。

小柴:快適性とか感性の研究をしていて感じていること があるんですが、人はある程度ブレーキというか、抑圧 されている方が進化学的にも向上することが多く、ダイ バーシティの面倒くささが、エネルギー源になるかもしれ ませんね。さらに、女性は向上心が高いと思っているので、 やはりこれからは女性が引っ張っていけばいいんじゃない

鍋山:これからは積極的にいろいろなつながりができる ように取り組みたいですね。

私たち大学の教員は、個人で仕事をすることが多く、研 究室に閉じこもりがちですよね。女性研究者の数は少な いので、なおさら、知り合いになったり、話したりするきっ かけもなく、個人個人が忙しくやっている状態です。

今後は、女性研究者同士で話をする機会があるのは良い と思いませんか。 島田: そういう雑談も出来る場所で、コミュニケーション

を取れる機会があることは、すごくプラスになると思いま

小柴:研究者の皆さんは大変忙しくて、なかなか時間が 取れないと思うんですけど、ダイバーシティ=多様性が進 化を招くということは、はっきり証明されているので、多 様な人たちがコミュニケーションをとることはやっぱり面 倒くさいんだけど、大切だと思いますし、やることの価値 を理解してもらって、積極的にコミュニケーションが取れ る機会を提供して欲しいです。

鍋山:本当ですね。今日は皆さんのお話を伺って、私自身、 ダイバーシティ推進室での取り組みについて、勇気をもら えました。プラスのエネルギーをたくさんもらえたので、 この先も頑張っていけます。

これからの山口大学での ダイバーシティについて

鍋山:この先、山口大学に欲しいダイバーシティに関する 支援や企画、ご要望などはありますか。

鳥田:女性研究者を増やすという意味では、やはり子育 て支援が必要だと思います。特に、保育園に関する支援 です。私が4年前に着任した時、2月に採用が決まって、 4 月には保育園に預けないといけない、さらに、子供 2 人を一緒の保育園に預けたいとなると、かなりハードルが 高くて、2 月だと一般の保育園の入園募集が既に終わっ ていて、その中で探さないといけないというのは、とても 大変でした。この段階で、心が折れるお母さんは多いと 思います。

また、出来るだけ研究時間を確保するために、長時間預 けることができる施設であったり、土日にも預けられると か、希望の条件に合った保育園に入れるということはすご く難しくて、保育園の支援があればいいなと思います。

鍋山: お子さんを抱えていらっしゃると、保育を誰かがやっ てくれないと働けませんので、保育支援は絶対条件です よね。ダイバーシティ推進室でも一緒に考えていきたいと

山口大学は 「保育三本柱」で

教職員のワーク・ライフ・バランス を支援しています







【一時保育サービスを開始します】

山口大学では、教職員の仕事と育児の両立支援として、未就学児の一時預かり保育を実施します。 学内の保育実施場所で、大学が契約した保育団体から派遣される保育者により、保育を受けることが できます。

対象期間:2022年1月25日~2023年3月31日

利用登録完了まで時間を要しますので、まずは利用登録をお願いします。 ※登録が完了するまで、利用予約はできません。

詳しい利用案内はコチラ →



いと思っています。

永嶌: 敷地内に保育園があると良いだろうと思います。 **鍋山:**かなり前に、学内に保育園を作ろうという話もあり ました。実現に向けて調査したところ、山口は幼児の待 機児童はそんなに多くなく、学童保育の待機児童が増え ている状態です。そのため、長期休暇中の学童保育を実 施しているんですが、今後も状況を見ながら考えていきた

島田: 今、学童保育「ヤマミィ学級」に預けさせていた だいているんですが、いろいろと要望を聞いていただいて 助かっています。例えば、保育時間の延長なんですが、 必要な研究のために 30 分の延長をお願いしましたとこ ろ、快く対応していただけて、そういう風に一つ一つ要 望を聞いていただいたりとか、要望は聞けなくても、今 後それをどのように解決していくかというような相談が出 来ることが、非常に心強くて、ありがたいと思いました。 サポートしていただいた分以上に、頑張ろうという気持ち

鍋山:ありがとうございます。ルールが決まっていて、は み出したらダメだというのは、人間じゃなくてもコンピュー ターでも出来ることだと思っています。そうではなくて、 ルールはこうで、何か要望があった時には、どうやったら 出来るかというのを考えるのが人間の仕事だと思っている ので、ダイバーシティ推進室では、一つ一つ個別に慎重 に対応しています。今後もそういう要望をいただければ ありがたいです。

小柴:私は、学部を越えるダイバーシティがもっとやりた いと思っているし、やって欲しいなと思っています。その 実現のためには協力させていただきます。

もう一つは、精神的な相談室、居場所作りをしたいと思っ ています。特に、理系のエンジニアの人たちは、人間的 な感覚を排除して、数字の世界や、物質の世界に追い込 むような専門領域というのもあって、追い込まれた人たち

の居場所を作りたいと努力しているところです。専門家や 臨床心理士さんに見ていただくのも非常に良いんですが、 そこまでいく前の受け皿として、いろいろな多様性、学生 側のダイバーシティを作るべきだと思っています。

鍋山:ダイバーシティ推進というと、教職員メインのよう に感じられるんですが、もちろん学生も入って、ダイバー シティ・キャンパスを作るということだと思っています。

永嶌: 学生を支援するという意味では、 私の所属する理 学部の中でも、女子学生だけではなく、男子学生も同じ ように駆け込める所が必要だと感じています。相談室と はちょっと違うんですよね。

理学部の先生方も圧倒的に男性が多いので、学生はどこ にも言えず、私のところに駆け込んでくる子がいます。少 し相談に乗ると元気になって、翌日から普通に出てくるの で、相談相手がいないことで来れなくなってしまう子がい るんだろうなと思うと、切ないですね。

鍋山:ダイバーシティ推進室でもカウンセラーさんがい らっしゃいますが、専門家もいるし、身近なところで相談 もできるという土壌を作るのも大切ですね。

カウンセラーによる相談制度もあるけど、私たち教員が

学生の細かい面倒をみなくていいというのではなくて、教 員と学生の関わりは何かを教えるという以前に、もっと基 盤となる人間関係が大事だと思っています。

相談体制については、複数整備して、選べることが必要

永嶌: 教員として相談を受けた時に、今度はその教員が 相談する場所が必要だと思います。学生から相談を受け て、アドバイスはするけど、果たしてこの対応でいいのか 悩む時があります。そういう時に確認出来たり、ちょっと まずそうだからフォローして欲しいという相談が出来る と、教員側も相談を受けやすいかなと思います。

鍋山: やっぱりそういう時は、ダイバーシティ推進室にぜ ひ連絡をというつもりでやっているので、そういう存在に

また、悩んだ時に、カウンセラーさんに話しを聞いてもらっ て、個人的に悩みを解決するのもありですが、同じような 問題にぶつかっている人が複数いる場合には、それは、制 度的に問題があるのかもしれません。ダイバーシティ推進 室は、その部分を調整する役目の部署だと思っているの で、今後もぜひお気軽にご意見なども聞かせてください。





小学校の長期休業中(夏・冬・春休み)に、教職 員等のお子様を対象として、山口地区(吉田キャンパ ス)、宇部地区(小串キャンパス)で学内学童保育 「ヤマミィ学級」を開催しています。

保育中に、教員の研究や多様な学生活動、職員の

知識や特技に関連した プログラムを実施して





病児保育

病児保育施設等利用助成制度

小学3年生までの子を養育する教職員が、病児 又は病後児の保育施設に預ける場合に係る利用料 金の一部を補助する制度です。 ※申請対象の条件あり

利用者の声

子供が熱を出しても仕事 を休めないことも多く、病 児保育に度々お世話になっ ています。利用回数が増え ると多くの費用がかかるた め、利用料金の一部を助 成していただき、大変助 かっています。



子供の看護に関する 特別休暇と病児保育を 利用した際の助成制度 が整備されており、子 育てと仕事の両立につ いて応援されていると 感じています。





シンポジウム「持続可能な地方創生を大学と共に実現 するには?」を開催しました

2021 年 7 月 12 日にキックオフシンポジウム「持続可能な地方創生を大 学と共に実現するには?」を開催しました。

シンポジウムは、新型コロナウイルス感染症の影響が先行き不透明な中、 参加者の安全と感染防止を最優先に考え、会場とオンライン配信を併用した ハイブリット開催とし、学内のみならず行政や企業、高等教育機関といった 学外の方々にも多くご参加いただくことができました。

シンポジウムでは、岡学長の挨拶に続き、文部科学省科学技術・学術政 策局人材政策課人材政策推進室長 三輪善英様より、国内の女性活躍推進 に関する動向や女性研究者の現状、本事業を促進する意義についてご説明 いただいた後、ダイバーシティ推進室長である鍋山副学長から、本事業に対 する取り組みや成果について報告しました。

基調講演では、筑波大学名誉教授の吉武博通先生より「持続可能な大学・ 地域創生とダイバーシティ」と題して、統計数字から見えてくる日本社会の 問題や、大学が抱える構造的課題、我が国における男女共同参画の現状な どを読み解いていただき、そして、個人や組織、地方が共に成長するために 必要な視点やダイバーシティを尊重する大切さについて、組織や立場が異な る参加者それぞれに分かりやすく、ご講演いただきました。

本シンポジウムでは、「ダイバーシティに取り組む意義を理解できた」、「古 い職場意識を打破することがダイバーシティ環境を創造すると強く認識した」 といったコメントをいただきました。また、ダイバーシティの重要性を呼びか けると共に、理解を深め、山口県の女性活躍につながる活動を広く知ってい ただく良い機会となり、今後の「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティ ブ」事業における課題等を共有できた有意義な会となりました。





AI× 研究データ マッチングイベントを開催しました



2021年7月22日に「Al×研究データマッチングイベント―AIと研究デー タの出会いを DAI ラボ (Diversity×AI) で一」を KDDI 維新ホールで開催 しました。

このイベントは二部構成で、第一部のセミナーでは、AI 技術の活用につい ての理解促進を目的とし、第二部のマッチングでは、組織、分野、立場の枠 を越えて多様な研究者が集い、アイデアを交換・共創することで、新たな研 究活動の展開や、異分野融合研究チームの形成を目指したものです。特に AI 研究者と他分野研究者のマッチングを促進するために、相談ブースを設け、 山口大学、山陽小野田市立山口東京理科大学、宇部工業高等専門学校が連 携し、研究者を紹介するほか、本学情報・データ科学教育センター所属の AI 研究者による AI に関するアドバイスも行いました。

セミナーでは、本学の教育学生・情報化推進担当の松野理事より「AI で できること〜山口大学及び県内企業の事例から〜」と題して、AIの可能性や、 具体的な事例などをご説明いただきました。そして、AI 技術を研究に取り入 れた事例発表として、教育学部の春日由美准教授と、共同獣医学部の三宅 在子准教授に登壇いただき、AI を取り入れながら様々な分野の研究者が参 加することで、新たな発見やより厚みのある研究・発見につながるという実 例を示していただきました。

マッチングイベントでは、共同研究に関する相談のほか、自身の研究には どのような AI 技術を組み込むことができるのか、といったさまざまな相談が 寄せられ、会場でマッチング成立や解決したものや、現在進行形でマッチン グを進めているものもあります。

今回のイベントには、山口大学の研究者や学生だけでなく、県内の高等教 育機関や企業、行政など幅広い分野からご参加いただき「AI、IoT や、ディー

プラーニングといった、分かる様で分からない用語から説明頂き、有意義だっ た」、「具体的な自分の課題を持ち寄ることで、中味のある交流になった」と いった感想が寄せられました。

本イベントでは、研究データに AI 技術を適用することで広がる可能性につ いて、実際の取組事例を交えながら考えるとともに、研究者同士が直接やり 取りできる有意義な機会となりました。ダイバーシティ推進室では、今後も、 研究の活性化や効率化、共同研究の促進を目指して活動をしていきます。









写直左上/司会の山根副室長 写直右上/教育 学部 春日准教授 写真中左/共同獣医学部 3 宅准教授 写真中右/教育学生·情報化推進担 当 松野理事 写真左下/マッチング相談会の様

介護相談トークセッション「仕事と介護の両立のために」 オンラインで開催しました

山口大学では、教職員の仕事と介護の両立支援として、NPO 法人 海を越 えるケアの手(シーケア)と法人契約を結んでおり、親の生活や介護につい ての不安を解消するために無料相談などのサービスを利用することができま す。その取り組みの一環として、2021年9月24日に介護相談トークセッショ ン「仕事と介護の両立のために」をオンラインにて開催しました。

本セミナーでは、教職員の皆さんからの事前に寄せられた質問に沿って、 ダイバーシティ推進担当の鍋山副学長がファシリテーターとなり、シーケア 所属の介護専門職である安喰氏と対話する形式で進めていきました。仕事と 介護の両立においては、各家庭によって様々な課題があり、質問内容も多岐 にわたりましたが、安喰氏から一つ一つ丁寧に回答をいただくことができまし

具体的には、遠距離介護で利用できるサービス・便利グッズの紹介から、 ケース毎の親との寄り添い方、ケアマネージャーとの関わり方、介護制度・ 保険に至るまで幅広い内容となりました。

参加者からは、「介護の問題は、各家庭環境、家族関係によって状況が異 なるので、こういったセミナーは、初期段階で聞いておく方が良いと思った」、 「親が老いていく現実に立ち向かう心構えができたような気がする」「介護と は親子関係を再構築していく期間なのだなという印象を持った」等、多くの 感想を頂きました。

今後も高齢化が進み、仕事と介護の両立問題はますます身近なものになり ます。不安や心配等を抱え込まず、いつでも気軽にご相談いただければと思 います。





安喰真雄氏(社会福祉士·介護支援専 門員)と 鍋山副学長によるトークセ



ご両親の介護に関するあらゆるご相談について相談窓口にてお受けし ます。(大学名、法人ID 番号をお伝えください) 介護に関するお闲り事や 悩み事は一人で悩まず、いつでもシーケアへご相談ください。

シーケアの相談窓口

& 03-3249-7231

詳しいサービス内容や法人IDはこちらからご確認ください



すべての人が尊重され自分らしく生きることができる。 そんな社会を、私たち自身が創っていく。



山口大学学生団体。SOGI や LGBTへの理解を深めるとともに、性的マイノリティの当事者が山口大学や社会の あらゆる場所において 安心して生活できることを目指して、令和元年発足した。

近年、LGBTをはじめとする性的マイノリティに対する偏見や差別をなくし、 誰もが自分の性的指向・性自認を尊重され、自分らしく生きることのできる 社会をつくっていこうという動きが全国的に広まっています。山口県でも、令 和 3 年 9 月より、宇部市にて県内初のパートナーシップ宣誓制度が導入され

こうした中、山口大学 ilma においても、様々な方法で LGBTQ+に関する 理解促進活動を行っています。主な理解促進活動として、SNSでの情報発 信や大学内でのイベントがあります。SNS では、LGBTQ+の基礎知識や 現状、日々の活動報告などを発信しています。

大学内でのイベントでは、「LGBTってなに?」「お母さんが2人ってダメ?」 をテーマに掲げ、LGBTQ+に関するディスカッションを設けたイベントを開 催しました。参加者からは、「セクシャルマイノリティに対する理解が深まる 内容でとても良かった」、「今後の自分自身の考え方の参考にしていきたい」 などの感想が寄せられました。私たち自身もイベントを通じて様々な方々と 意見交換をすることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

山口大学ilmaは、こうしたイベントの開催やSNSでの情報発信をするため に、日々の活動では LGBTQ+に関する知識を身に付ける学習会やイベント に関する会議などを行っています。今後も、LGBTQ+についての理解促進 活動として、LGBTQ+の基礎知識はもちろん、「自分らしく生きることの大 切さ」や「知らないことを知ることの重要性」について多くの人に伝えていき たいと考えています。そして、「すべての人が尊重され、自分らしく生きるこ とのできる社会」を私たち自身が創っていきます。



写真上/LGBTQ+についてイ ベントを開催。学び、意見交 換することで理解を深める。 写真下/ilmaのメンバー。 SNSで情報発信しているので







